

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 日本国語教育学会

(代表者 桑原 隆 会員数 約2,900人)

TEL 03-6801-5951

1 前 文

現代文・古典ともに本文は読みやすく、長さも適切である。学習指導要領に沿っており、意欲をもって学んできた生徒たちが、その成果を発揮できる問題であった。ただし問題の総量が非常に多い。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

第1問 文章の内容・長さは妥当。帰納による論理構成に難しさを感じる受験者もいるだろうが、基本的には二項対立を乗り越えていくという論理展開で読みやすい。本文がやや古いにも関わらず、「きわめてアクチュアルな現代的問題」といった表現が使われているため、初出を示して欲しい。一部語彙が難しく（特に一段落で多数の注がある）、惑わされた受験者もいたのではないかと。

問1 社会的用語に結びついていて良い。前年度出題の漢字の意味を問うものはあって良かった。

問2 本文の論理展開における筆者の立場を把握する問題として妥当。導入として良い。

問3 誤答のバリエーションが豊富。難易度も妥当。問題に取り組む中で本文理解が進む。

問4 やや選択肢が易しいが、誤答④は本文の論理展開をあやふやに理解していると間違えやすいところで、本文のまとめにつながる筆者の考えを正確に捉えているか問う問題になっている。

問5 論理構成や展開に関わる出題がある（その価値が示される）ことは、普段の授業とつながるものとして良い。やや平易なのは気にかかる。ここの選択肢は5つでも良かった。

問6 「書くこと」につながる問題があるのは良い。しかし提示されている【文章】が、本文を踏まえた「作品鑑賞のあり方について自身の経験を基に考え」た文章として適当なものかは疑問が残る。一行目「しかし、」以降は、本文の精読と離れた自分の経験や感想の羅列になっている。こうした文章がある種のモデルとして掲載されることの是非は（今回の第1問が複数テキストの出題といえるかどうかを含めて）問われるだろう。テキストへのメタ認知を問う問題なのだから、Sさんの【文章】を相対化する、教師（や生徒）の文章や発話があって良かった。

第2問 心情説明だけではない問いも多く、設問のバランスが良かった。本文も平易で受験者にとって親しみ深いものであったと思われる。非常に新しい作家を扱っており、意欲的。

問1 本試験では久々の出題だが、改めて語彙の重要性を確認する上でも必要な問題であった。

問2 正答①の「その場」が何を指すのかわかりにくいだが、その他の誤答の誤りが明確で妥当。

問3 「友人の対応」の理由を尋ねるといふ設問の書き方の是非は一考してほしいが、友人の発言と人間性を含め、おぼとの関わりを問う問題は単なる心情説明に留まるものでなく良かった。

問4 細かい動作の描写から心情をあぶり出す問題で小説の問題として非常に良かった。

問5 イチナとおぼ、周囲の人間との関係性を「は」という助詞の性質に着目しつつ解く問題で、この位置にあって良い問題。正答②は「見誤らずに捉えたい」は傍線部「ごまかされたくない」の言い換えかと思うが、それはイチナの思いを説明する上で適当かどうかは疑問が残るところ。

問6 正答②「遊具の影の動き」は多様な解釈が出来るようで、「適当でないもの」の選択肢としてふさわしいかは疑問が残る。

問7 本文・【資料】・対話の関連付けが密で新傾向の問題形式が機能している。教師の存在によ

るものか、生徒M・Nの対話を通じて、各文章の関連性が明らかになっている点も良い。各文章の往還により思考力を問う問題となっている。対話の出来がよいだけに、受験テクニックとして先に対話を読んでから本文を読むような、小手先の解き方を促すものになることは危惧される。

第3問 読みやすく、本文の長さも妥当である。「国語総合」の範囲ということ を考慮すると、牛車 図を含めた(注)も適切である。登場人物の説明がリード文にあれば、楽しみながら読めたらう。

問1・2 妥当。特に(注)2が、問2の正解を導く布石になっており、工夫が見られる。

問3 知識や解釈を求められる部分が多いが、選択肢が簡潔なので適切である。ただし他の問題と比べて難しいので、配点を重くしても良かったのではないかな。

問4 関連する古文を読むのは負担感があり、架空の話し合いだと教師の誘導になりがちであるので、このような「解説した文章」という出題はおもしろい。本文を読み深めることができ、作品を尊重した設問と言える。(i)和歌を読ませようという意図が感じられ、妥当。(ii)誤答の選択肢の表現が大袈裟だが、平安時代的な世界がわかりやすくなるように作られていて、妥当。(iii)「解説した文章」を読まなくても本文だけで解答できてしまう。また正答③「軽率にふるまって」は、慌てて一生懸命に仕事をする態度の説明としては、やや疑問が残る。

第4問 (注)が19もあり、煩雑。作品名は(注)にはせず現代文にして本文の前に埋め込むべき。

「華清宮の全景」のイラストは読解のヒントにはなるが、必ずしも必要ではない。本文と(注)を行ったり来たりしなければならず、読解力を正しく測ることができないのではないかな。ページをめくる回数を減らし、見開きで情報が完結するようにしてほしい。

問1～3 学習指導要領に即しており妥当。特に問2(イ)は現代語としても使えてほしい語句。このような言語文化的な出題を今後も期待する。問3は対句や漢文特有の表現を含み、漢文を読む力を問うのにふさわしい問題。ただしこれらは、出題の形式にとらわれ過ぎていないかな、今後注意深く見ていく必要がある。

問4・6 誤答に明らかな誤りがあり、妥当。

問5 新課程に即した出題への努力は見て取れる。しかし選択肢が長く受験者に負担がかかるので、表形式にしてはどうか。受験テクニックで解答をしぼれてしまうことも問題である。

3 総評・まとめ

問題冊子全体で50ページ超は、本文が適切でも全体の分量が多すぎる。これは減らしてほしい。

4 今後の共通テストへの要望

特に古典では情報量の多さが目立つ。不要な情報を処理することが国語の力であると、受験者に誤った認識を持たれることが危惧される。特に来年度以降、大問が1題増えるので、本質的な思考力を問えるような出題と提示を期待する。